

食卓が 勉強机



吉村 幸代

五月、安曇野は大型農機具と人の姿で活気づく。好天の休日ともなると何処も一家総出の田植えとみえて、「田舎にも老若男女こんなに入りたいのか」と驚かされるほどである。猫の手に負けじとはかり、私も実家の手伝いに急行した。

入れる。ヒヤッ、ヌルッ。意を決し重心を移して、爪の間が泥で染まると度胸も揺わった。私の生命を賣んでくれた米は、全てこの土から採れたもの。半世紀以上の間、田を守り続けている母の人生を想った。

私が子供の頃、田植えは何から何まで手作業で、農家組合の共同作業で行われたりしていた。各戸の苗代に種籾を蒔いて苗を育て、それを早く女たちが腰を屈めて植え付ける、あの光景である。隣組の人たちが集まって一斉に取り掛かると、我が家の田植えはあつげなく終わり、実にありがたかった。だが、その借りを返すため、母は延べ二十日間も他家の手伝いに行かねばなら

母なる米

なかつた。当時、学校には農繁休業があつた。家の手伝いをする休みと理解してはいたものの、小学校低学年の私にできることは、急な雨の中、母に耕横様のビニール合羽を肩に走ることくらい。日がな弟と草花を摘んだりして過ごしていた。

ある夕方、裏の小川でいつものように足を洗う母に「おかえり」と声を掛けると、母の目に光るものがあつた。子供心にも思い当たる節はあつた。私は続ける言葉を見失つた。皆と横並びで競うように苗を植え続ける作業、それを二十日間も休まずに続けるの

は、さぞかし辛いに違いない。体調の悪い日もあるだろう。翌日、「何か手伝えることはないかなあ」と祖母に米の研ぎ方を習い、私は初めて御飯を炊いた。「一粒でも無駄にするとバチが当たるでな」。祖母の教えは今も、あの夕方に見た母の涙の記憶と共に蘇る。流し台の隅から一粒をも拾い集める自分がいる。いかに飽食の時代が来ようとも、米粒に払う敬意は別格だ。

あれから数十年。機械化が進み、田植え作業は楽になつた。一方、農村部を離れて暮らしていても、私の中では、「安曇野生まれの身体には農耕民族の血が流れている」と

いう意識が年を追って生来の怠け者でかかわらず、晴れたのは落ち着かない。この季節、夕暮れ野には独特の匂いが入った田の、泥の懐かしさに、車窓がむ風を胸一杯に吸い取る。広々と水の張りが、太古の鏡のようきながら屋敷林を映している。

いずこの田にも、の涙や汗が沁み込んでいた。故郷の原風景——私たちが守り、と引き継いでいかならない大切なものが揃っている。

(主婦!!!)